

序『カラム』の時代Ⅷ

マレー・ムスリムの越境するネットワーク

坪井 祐司

本論集は、1950年から1969年までシンガポールで発行された月刊誌『カラム(Qalam)』とそれを取りまく同時期の東南アジアのムスリム社会の動態に関する論考をまとめたものである。以下では、まず『カラム』誌について簡単な紹介を行ったうえで、この論集のもととなった『カラム』プロジェクトおよび本論集の内容を紹介する。

なお、この本編は『カラム』を利用した共同研究における論集の八編目にあたるものである。このため、『カラム』誌およびプロジェクトの紹介については、過去七編の論集の序論と重なる部分があることをあらかじめおことわりしておきたい。

1. 『カラム』について¹⁾

『カラム』は、1950年7月にシンガポールにおいてエドルス(Edrus)²⁾により創刊され、エドルスの死去により1969年10月を最後に停刊するまで228号が発行された。この20年間という発行期間は、創刊後1、2年で停刊となることがめずらしくなかった当時のマレー語雑誌としては長いものであった。これは、同誌がマレー・ムスリムの間に受け入れられていたことを示している。

『カラム』の特徴は、第一にその記事が一貫してジャウイ(アラビア文字を改変したマレー・インドネシア語の表記法)によって書かれていたことである。マレー・インドネシア語の表記法は、この地域のイスラム³⁾化

とともにアラビア文字を使用したジャウイが主流となった。しかし、19世紀後半以降ヨーロッパの植民地権力によりマレー語の公式のローマ字表記が定められ、行政や教育の場で使用されるようになると、徐々にジャウイはローマ字にとってかわられた。旧オランダ領(現インドネシア)地域では20世紀初頭以降、旧イギリス領(マラヤ、シンガポール)でも1960年代までに多くのマレー語刊行物がジャウイからローマ字表記に切り替わった。しかし、『カラム』は創刊以来1969年の停刊まで一貫してジャウイ表記を固守した。これは、『カラム』が非ムスリムを含めた幅広い読者を獲得することよりも、対象をムスリムに限定した主張を発信することを目指していたためであろう。

第二に、国境を越えた東南アジアのムスリムの紐帯を強調したことである。シンガポールで発行されていた『カラム』の主な読者はシンガポール、マラヤ在住者であったが、執筆者のなかにはシンガポール、マラヤだけではなくインドネシアのムスリム知識人も含まれていた。このため、インドネシアやその他東南アジアのムスリム社会の情勢を含む幅広い内容の記事が掲載された。さらに、エジプトなど中東で学ぶ留学生も寄稿しており、中東のイスラム思想を積極的に紹介した⁴⁾。

『カラム』の第三の特徴は、この地域の他の定期刊行物との交流である。『カラム』の記事のなかには、他の刊行物に掲載されていた記事が転載されたものもある。また、英語も含めて新聞・雑誌記事などを引用し、それに対して論評を加えたものもある。このため、『カラム』をみることで、単に同誌の主張というだけでなく、当時のこの地域のジャーナリズムの世界でなされていた議論のあり方や内容をうかがうことができる。

『カラム』は当時のマレー語ジャーナリズムの一翼を担っており、そのなかで民族主義に対抗するイスラム主義勢力の思想を代表する媒体と位置づけられる。

1) 『カラム』誌については、[山本 2002a]が詳細な紹介を行っている。
2) 本名はサイドアブドゥッラー・アブドゥルハミド・アルエドルス(Syed Abdullah bin Abdul Hamid al-Edrus)、『カラム』ではエドルス、アフマド・ルトフィ(Ahmad Lutfi)などのペンネームを使用していた。1911年に当時のオランダ領東インド・カリマンタンのパンジャルマシんでアラブ系の両親のもとで生まれた。その後シンガポールにわたって出版・文筆活動を開始し、1948年にカラム出版社(Qalam Press)を立ち上げた。彼の伝記として[Talib 2002]がある。
3) 現在学術用語としてはイスラームと表記するのが一般的であるが、マレー・インドネシア語には長母音が存在しないため、本稿では現地の発音に即してイスラムと表記する。ただし、以下の各論において用語の選択は著者にゆだねられているため、表記が混在する結果となっていることをあらかじめお断りしておく。

4) 編集者エドルスが1956年にシンガポールにおけるムスリム同胞団を結成すると、『カラム』編集部は事務局となり、『カラム』は同団体の事実上の機関誌となった[山本 2002a: 263]。

『カラム』が刊行されていた1950年代、60年代はマラヤ(マレーシア)、シンガポール、インドネシアにおける脱植民地化の時期であった。このため、従来の研究関心は民族主義勢力によるそれぞれの国民国家の建設に集中しており、同時期の政治や社会におけるイスラム主義勢力の動向には焦点が当てられてこなかった。しかし、『カラム』の記事からは、当時のムスリム知識人がこれらの国々が独立国家となってもさまざまな形で国境を越えたムスリムの連帯を模索し、対案を提示していたことが明らかになる。

『カラム』は当時のマレー・イスラム世界の知識人の思想や活動を明らかにするうえで貴重な資料であるにもかかわらず、これまで十分に利用されてこなかった。これは、『カラム』がジャウィで書かれているために利用者が限定されてしまっていたことにくわえて、複数の機関に分散して所蔵されていたため体系的に利用するのが困難であったことなどが理由として考えられる。

以上の認識のもとで、本論集のもととなる『カラム』プロジェクトは、同誌を収集して一つの資料として集めたうえで、記事の見出しおよび本文をローマ字に翻字してデータベース化し、一般公開して研究のための便宜を向上させることを目的としている。

2. 『カラム』プロジェクト

現在の『カラム』プロジェクトは、京都大学東南アジア地域研究研究所(旧京都大学地域研究統合情報センター、以下京大地域研と略記)の共同研究「東南アジアのムスリムをめぐる社会的亀裂とその対応(研究代表者:坪井祐司)」および「ジャウィ文献と社会」研究会が中心となって行われている。『カラム』の所蔵機関である京大地域研の共同研究は、山本博之を中心として立ち上げられ、本年度で7年目となる。「ジャウィ文献と社会」研究会は、2009年に解散したジャウィ文書研究会の研究を継承し、発展させるための研究会の一つである⁵⁾。

プロジェクトの主たる活動は、『カラム』に関するデータベース構築と『カラム』を使用した研究である。ここでは、プロジェクトのこれまでの成果と今後の方向性についてまとめてみたい。

5) 「ジャウィ文献と社会」研究会の詳細については、同会のホームページを参照(<http://www.cias.kyoto-u.ac.jp/~yama/jawi/index.html>)。

(1) 『カラム』雑誌記事データベース

プロジェクトの基礎となる資料である『カラム』は、山本博之により収集された。山本は、シンガポール国立大学図書館、マラヤ大学ザアバ記念図書館などにおける資料収集により、『カラム』の全228号を収集した。そして、京大地域研が進めている雑誌記事データベース・プロジェクトの一部として、『カラム』紙面をデジタル化し、それぞれの記事の見出しのローマ字翻字を関連付けする作業を行った。これにより、ローマ字による記事見出しの検索により当該紙面を呼び出すことができるデータベースが作成され、一般に公開されている⁶⁾。

ただし、京大地域研の『カラム』雑誌記事データベースは、現在のところローマ字による記事見出しの検索はできるものの、記事本文の検索はできない。本文も検索の対象とするためには、記事をローマ字に翻字してデータ化し、それをデータベースに連結する必要がある。このため、2009年から「ジャウィ文献と社会」研究会のメンバーによる『カラム』の記事本文の翻字作業が開始された。

『カラム』記事のローマ字翻字作業は、2011年度から京大地域研の地域情報学プロジェクト(雑誌データベース班)による事業として行われることになった。これは、マレーシアの出版社クラシカ・メディア(Klasika Media)社との提携により行われたもので、『カラム』のすべての記事を年代順に翻字し、検索が可能なPDFファイルをジャウィ版と同様のレイアウトにして作成するものである。この作業は2016年に完了し、その成果をもとに翻字された記事本文をデータベースに組み込み、本文中の単語の検索から当該紙面を読み出せるようにするための「カラム雑誌記事データベース」の構築も進行中である⁷⁾。

さらに、『カラム』雑誌記事データベースは、他のマレー・インドネシア語文献やコーランなどアラビア語文献のデータベースとの接合が構想されている。さしあたり、期待されるのは以下の方向である。

第一に、『カラム』以外の資料を含めたマレー・インドネシア語文献の統合データベースの構築である。地域や時代を越えた記事の横断的な検索は、マレー・インドネシア語定期刊行物の研究には重要である。マ

6) 京大地域研の『カラム』のデータベースについては、同研究所のホームページを参照(http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000003QALAM)。

7) データベースは現在構築中であるが、その一部は公開されている(<http://majalahqalam.kyoto.jp/>)。

レー・インドネシア語雑誌は短期間のうちに停刊となるものが多いが、同じ編集者や執筆者が別の雑誌を立ち上げることもめずらしくない。くわえて、その内容においても、雑誌の枠を越えた引用や論争が行われてきたため、複数の雑誌を一つの言論空間、資料群としてとらえる必要がある。このため、京大地域研の雑誌記事データベース・プロジェクトでは、刊行期間が長いマレー・インドネシア語定期刊行物を収集し、誌面のデジタル化および記事見出しによる検索可能なデータベース作成を進めている⁸⁾。

もうひとつは、オーストラリア国立大学が実施しているマレー語文献コンコダンスプロジェクト(以下MCプロジェクトと略記)との連携である⁹⁾。MCプロジェクトでは、主に20世紀以前の王統記を中心に本文テキストをローマ字化したものをもとにコンコダンスを作成し、データを順次公開している。また、シンガポール国立大学は1930年代のマレー語日刊紙のローマ字翻字を行っており、この結果をMCプロジェクトと接合することが計画されている。これに1950、60年代を主に扱う京大地域研の雑誌記事データベースを接合することで、より広い範囲のマレー・インドネシア語文献を包括した統合データベースを構築することができよう。

(2)『カラム』共同研究

プロジェクトのもう一つの柱は、『カラム』のデジタル・アーカイブを利用した共同研究である。プロジェクトでは、メンバーがそれぞれの問題関心にもとづいて『カラム』やその他の同時代資料の分析を行い、年に3回程度の研究会を開催して議論を行っている。その成果としてまとめられたのが本論集である。ディスカッションペーパーは2010年以来年1回発行されており、これが8編目となる。本編の内容については次節で紹介することとしたい。

2016年度の共同研究では、これまでの『カラム』研究の蓄積を踏まえつつ、同誌とその言説を東南アジアのムスリム社会全体の文脈へと位置付けることを目的とした。このため、インドネシアのイスラムを専門とする研究者を新たにメンバーとして加え、『カラム』以外のイスラム運動や出版物の資料もまじえて1950、60年代の東南アジアのムスリム社会の動態を総合的

に分析することを目指した。この作業を通じて、ムスリムが様々な形の統合を模索した脱植民地化の過程とその時代性をうかびあがらせることが可能になると考えたためである。

同時に、プロジェクトでは、『カラム』研究を国際共同研究へと発展させるため、マレーシアやシンガポールにおける共同事業や成果の発信に努めている。2013年度から、京大地域研とクラシカ・メディア、マレーシア・ジャウィアカデミー(Akademi Jawi Malaysia)との提携により、『カラム』に関する電子出版事業が開始された。これは、翻字された『カラム』記事の復刻版およびそれに関する論文集『遺産から展望へ(Dari Warisan ke Wawasan)』を電子書籍として出版するものである。ジャウィの電子アーカイブ化事業は、マレーシアのマレーシア国立図書館、言語図書館(Dewan Bahasa dan Pustaka)とも提携して行われることとなった。それとともに、本プロジェクトはこれまでに年1回程度マレーシアにおいて『カラム』に関する研究成果を報告するワークショップや学会セッションを開催してきており、成果の国際的な発信も行っている。2017年2月18日には、シンガポールのマレー・ヘリテージ・センター(Malay Heritage Centre)にて国際ワークショップ「カラムの時代(Age of Qalam)」を開催した。これは、ジャウィ資料を中心的に扱った同センターの企画展示「発信者の創生:1920~60年代のマレー近代性の印影(Mereka Utusan: Imprinting Malay Modernity 1920s - 1960s)」にあわせて企画されたものである。

プロジェクトでは、今後ともマレーシア、シンガポールの研究・出版に関わる諸機関と連携し、デジタル化した『カラム』の公開、共有を進めるとともに、研究面でも国際的な共同研究へと発展させていくことを計画している。

3. 本論集の構成

本論集は、論文5編と『カラム』に関する資料編からなっている。以下、内容を簡単に紹介したい。

山口元樹「1950年代のインドネシアにおけるジャウィ復活論」

山口は、西スマトラのミナンカバウのイスラム知識人を中心に起こったジャウィの復活論について取り上げた。マラヤと比べてインドネシアでは早い段階で

8) 京大地域研でデータベース化を進めている雑誌の詳細については、[山本編 2010a: 6]を参照。

9) 詳細については、プロジェクトのホームページを参照(<http://mcp.anu.edu.au/Q/mcp.html>)。

ジャウイからローマ字への転換が起こっていた。そのなかでジャウイ復活論が起こった背景は、独立直後にインドネシアのイスラム勢力が国家や社会のイスラム化の促進を求めていることである。インドネシアのジャウイ復活論は、『カラム』に寄稿されたハムカの論説によってマラヤにも伝えられ、両地域で相互の意見交換が見られた。ただし、インドネシアのイスラム勢力は、マレー・イスラム世界を意識する一方で、インドネシアという国民国家の枠組みの中でイスラム化を進めることに主眼を置いていた。山口は、マレー・イスラム世界とのつながりとインドネシア国内のイスラム運動の関係性のさらなる分析が必要であると主張した。

坪井祐司「マレーシア、シンガポールの結成とマレー・ムスリム——『カラム』からみた脱植民地化」

坪井は、1960年代のマレーシア結成とシンガポールの分離という政治変化をめぐる『カラム』の論説をとりあげた。同誌は、シンガポールのマレー・ムスリムの立場から新たな国民国家をめぐる構想に積極的に発言した。マレーシア構想に賛成しつつ、その対抗上出されたマフィリンドも肯定的にとらえた。シンガポールにおいて少数派であった彼らは、さまざまな国家構想が交錯するなかで、華人、共産主義の脅威をできる限り薄め、自身を含めたマレー・ムスリムの立場を強めるための構想を模索した。彼らのスタンスは一見マレー民族主義に近いように見えるが、インドネシアのスカルノ政権を敵視したことから、あくまでムスリムの連帯という視角からマレー人の統合を支持したことがわかる。

野中葉「マレーシアとインドネシアのダアワ運動の接点——インドネシア側の資料を用いて」

野中は、『カラム』の時代のあとの1970年代におけるマレーシアとインドネシアのダアワ運動の関係性を検討した。インドネシアの大学ダアワ運動の初期の拠点だったバンドゥン工科大学のサルマン・モスクを拠点として展開された運動の分析から、1960年代後半から1970年代初頭にかけて、インドネシアとマレーシアの大学生を中心とするダアワ運動の間に人的交流があり、協力関係が築かれていたことを明らかにした。インドネシアでは政権から危険視されて在野の運動として展開される一方、マレーシアでは政権に加

わって政府のイスラム化に貢献するという違いも見られたが、両国のムスリム・エリートたちの民間レベルの交流と協働は、開発が進む時代における両国のイスラム化の萌芽を知る上で重要な意味を持つと結論付けた。

篠崎香織「華人のイスラム教への改宗(1950-60年代)に見るマラヤ地域の社会と国家」

篠崎は、『カラム』が出版されていた時期のマラヤにおける華人の改宗についてとりあげた。『カラム』における改宗した華人の記事・写真、さらには同時代の英語紙『ストレイツ・タイムズ』、マレー語紙『ブリタ・ハリアン』、華語紙『南洋商報』の関連記事の分析から、ムスリムとなった華人が一定数いたことを明らかにした。そして、マラヤ連邦政府が華人の改宗を積極的に進めており、華語を通じた布教活動が行われていたこと、香港および台湾の華人系ムスリムが積極的に関わろうとしていたことを指摘した。さらに、改宗者は華人、マレー人という民族の枠組みを揺るがす存在であり、当時の言説は1970年代以降成立した現在の民族概念とは異なる面があるため、その変遷の過程を再検討する必要があると主張した。

山本博之「越境する映像とせめぎあう物語——

1950年代の『カラム』に見る外国映画批判」

山本は、『カラム』の外国映画に対する批評から同誌と映画の関係性を分析した。『カラム』は、イスラムの観点から不適切と考える外国映画の劇場公開に対して、適切な知識を記した冊子の刊行によって対応しようとした。『カラム』が外国映画に対して強い警戒心を見せたのは、越境性の高いメディアである映画が民族別・宗教別の言論空間に侵食してくることへの危機感からであった。ジャウイにこだわった『カラム』においてはマレー・ムスリムのあるべき姿やめざすべき姿を巡る議論が編集者と読者のあいだで積み重ねられており、映画が提示するものはそれとはかけ離れていた。さらに、娯楽性が高く影響力が大きい映画によって学習を通じて真理に到達するという態度が疎かになりかねないことへの懸念も示されており、両者の価値観や秩序観とのあいだにコンフリクトが生じていた。

資料編：「千一問」試訳

コラム「千一問」は、『カラム』に毎号掲載されていた名物コラムであり、読者から投稿された質問に関する

Q&Aコーナーである。「千一問」については前号で特集し、第1号から第25号までの質問と回答の日本語訳を掲載した[坪井・山本編 2016: 43-95]。その続編として、第26号(1952年9月)～第35号(1953年6月)の「千一問」の試訳を掲載する。

4. 『カラム』の時代

各論考はいずれも限定された資料をもとにした試論であり、その位置づけについては今後の検討課題となるであろう。ここでは、暫定的なまとめとして、本書の5編の論考から浮かび上がる『カラム』とそれを取りまく東南アジアのマレー・ムスリム社会の位置づけについて、簡単に記してみたい。

本編の特徴は、『カラム』を取りまく社会状況を明らかにする論考が採録されていることである。これまでの論集は、同誌の記事を中心として、出版社・読者の中核であるマラヤ・シンガポールのマレー・ムスリムに焦点を当てたものが多かった。一方で、本編では、インドネシアにおけるイスラム勢力の動向を扱った山口論文、野中論文やマラヤの華人を扱った篠崎論文を通じて、マレー・ムスリムがどのような関係性のもとで言論活動を行っていたかがわかる。

ジャウイ文字を扱った山口論文からは、インドネシアとマラヤ・シンガポールのマレー・ムスリムが複数の媒体間で議論を共有していたことがわかる。彼らは政治的にも連携を模索しており(坪井論文)、そうしたネットワークは1970年代以降のインドネシア、マレーシア両国における「イスラム化」の動きにも影響を与えた(野中論文)。同時に、多民族社会のマラヤ・シンガポールでは華人という数的にも大きな他者がおり、マレー・ムスリムもその存在を常に意識していた(篠崎論文)。言論空間は、国境や民族を越えて開かれており、相互の参照が前提となっていた。第二次大戦後は媒体が増加し、大衆化が進んだことに加え、映画に代表される映像も新しいメディアとして加わり、空間はより多層的となった(山本論文)。これまで扱ってきた『カラム』の言説も、こうした文脈を踏まえていく必要があるだろう。

さらに、野中論文は時間的な変化に関する論点を提示している。『カラム』が出版された1950、60年代は脱植民地化と新たな国民国家の建設という政治、民族主義の時代であり、70年代以降は経済開発の時代へと変化していく。『カラム』とイスラム勢力にとって、当時

の最優先課題であった国民国家建設の中で、イスラムがどのような社会的位置を占めるかは大きな課題であった。東南アジアのムスリムを取り巻く社会や言論の状況の変化を考慮することで、『カラム』のもつ時代性をより明確にすることができるであろう。

参考文献

- Talib Samat. 2002. *Ahmad Lutfi: Penulis, Penerbit dan Pendakwah*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.
- 坪井祐司・山本博之編 2011 『『カラム』の時代Ⅱ——マレー・イスラム世界における公共領域の再編』(CIAS Discussion Paper No.19) 京都大学地域研究統合情報センター。
- 坪井祐司・山本博之編 2012 『『カラム』の時代Ⅲ——マレー・イスラム世界におけるイスラム的社会制度の設計』(CIAS Discussion Paper No.23) 京都大学地域研究統合情報センター。
- 坪井祐司・山本博之編 2013a 『『カラム』の時代Ⅳ——マレー・ムスリムによる言論空間の形成』(CIAS Discussion Paper No.32) 京都大学地域研究統合情報センター。
- 坪井祐司・山本博之編、ファリダ・モハメッド協力 2013b 『ジャウイを学ぶ』(CIAS Discussion Paper No.38) 京都大学地域研究統合情報センター。
- 坪井祐司・山本博之編 2014 『『カラム』の時代Ⅴ——近代マレー・ムスリムの日常生活』(CIAS Discussion Paper No.40) 京都大学地域研究統合情報センター。
- 坪井祐司・山本博之編 2015 『『カラム』の時代Ⅵ——近代マレー・ムスリムの日常生活2』(CIAS Discussion Paper No.53) 京都大学地域研究統合情報センター。
- 坪井祐司・山本博之編 2016 『『カラム』の時代Ⅶ——コラム「千一問」にみるマレー・ムスリムの宗教実践』(CIAS Discussion Paper No.62) 京都大学地域研究統合情報センター。
- 山本博之 2002a 「資料紹介『カラム』」『上智アジア学』20, pp. 259-343。
- 山本博之 2002b 「ジャウイ綴りマレー語の書き方と読み方: 20世紀マレーシア地域を中心に」『上智アジア学』20, pp. 359-382。
- 山本博之編 2010 『『カラム』の時代——マレー・イスラム世界の「近代」』(CIAS Discussion Paper No.13) 京都大学地域研究統合情報センター。